

# みんな語り語り 3・11 震災の記憶

題字 中川 順

『みんな語り語り 3・11 震災の記憶』は前号に引き続き、昨年3月の東日本大震災発生時、被災地の放送局はどう対処したか、さらに、その後、被災地の現実をどう伝え続けているかを綴って頂きました。この教訓を後世に伝える民放史でありたいと考えます。 【編集委員会】

## 記憶を風化させず

伝えつづける 「3・11」



TBC東北放送報道制作局 部長(震災報道担当) 佐々木智之

かねてから私たちは、来るべき宮城県沖地震に備えて訓練を続けてきた。日々のニュースに加えて、

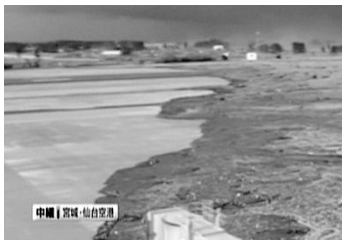


地震発生直後のニューススタジオ

2011年3月11日午後2時46分の少し前、東北放送の情報センターで緊急地震速報のアラームが鳴り響き、揺れが始まった。それは覆いかぶさるような大きな振動となり、スタッフの悲鳴が響いた。ラジオは午後のワイドを中断、揺れは続くが躊躇できない、アナウンサーがニュースのブースに飛び込みマイクに向かった。テレビは、揺れが収まるや直ちに報道特別番組を開始、程なく、大津波警報が発表された。アナウンサーは、声を張り上げ、聴取者、視聴者に高所への避難を呼びかけ続けた。

毎年、ラジオやテレビで防災特番を制作し、地震や津波への対策を呼びかけてきた。1978年の宮城県沖地震の教訓もある。今回の震災でも、過去の経験に則って、取材や情報収集にあたり、放送を続けた。しかし、**障害相次ぐ中、震災被害の全容が次第に**

今回の震災による津波は、想定を遥かに超えた規模で、震災報道にも様々な障害が立ち上がった。ヘリコプターが仙台空港を襲った津波で被災してしまった。沿岸部に設置してある情報カメラも次々に停電や津波で映らなくなった。SNG中継車も、津波が押し寄せた沿岸部は浸水していて危険で近づけない。



情報カメラが捉えた津波

電話やインターネットもつながりにくくなった。

こうした中、女川原発や仙台空港の情報カメラがとらえた津波、また、自衛隊のヘリコプターによる炎に包まれた気仙沼湾の映像から、とてつもない被害になったことがうかがえた。そして一夜明け、系列局のヘリコプターが被災地上空から中継し、ようやく変わり果てた街の姿を目の当たりにした。

これまで、大規模災害で役立った情報収集手段が次々に断たれる中、いかに被害の全貌をつかむことが出来るかを問われた。

### 被災者に「寄り添った」ラジオ放送

ラジオは、地震発生時から災害報道の特別体制に入った。



定員1名マイク1本のラジオニューススタジオ

それから、3月22日までの11日間、24時間震災報道の特別番組の放送を続けた。

被災情報に加えて、生活情報や安否情報を伝えた。また、ファックスやメール、SNSでリスナーからのメッセージを呼びかけたところ、10日ほどで約2万通も寄せられた。特番では、これらのメッセージを出来る限り放送した。



TBCラジオに寄せられたメッセージ

また、避難所からの中継で、リポーターが「赤ちゃんに飲ませるミルクがなくて母親が困っている」という被災者の訴えを紹介したところ、程なくして避難所を訪れた女性が母親に代わってミルクを飲ませてあげたということもあった。

まさに、ラジオがつないだ命の「絆」である。

TBCでは、現在も毎週1回、ラジオの震災特番を放送し、被災者の声を伝え続けている。

### 避難呼びかけは役に立ったか

ところで、今回の震災で、どれだけ私たちの放送が被災者の役に立ったのだろうか。

ラジオ・テレビの特番では、「避難」を呼びかけ続けた。だが、テレビは、県内のほぼ全域が停電したことで、視聴手段は、携帯電話のワンセグ、カーテレビなどに限られた。

一方、ラジオは、「8割の人が何らかの形で聴いた」と答えており、大災害時のラジオの信頼度を再認識した。その放送で、「宮城の津波は6メートルの予想」と聞いて、避難を逃れた人も少なくないようだ。



南三陸町を飲み込む津波

その一方、なかなか津波が来ないので、自宅などに戻ってしまい、犠牲になったというケースも多かったという。

気象庁では、大地震発生時の情報提供について、より避難行動につながるよう見直しをしている。私たちも、「ただちに」「海から」「遠い」場所よりも『高い』場所へ避難」することなど、今回の震災を踏まえて、より具体的な呼びかけをしていかなければならない。

### 震災報道継続の困難

会社も被災し、放送の継続には大きな困難が伴った。

まずは停電で、震災発生後から自家発電に切り替わった。しかし、燃料の入手が困難で、あと半日停電が続いていたら停波するところだった。

またラジオは、沿岸部にあった送信所が被災し、震災発生翌朝に停止したため、一時、本社鉄塔にある非常用送信機から電波を出して急場をしのいだ。

仙台の本社は建物の一部が損壊、断水が1か月近く続いた。数日間は仙台でも電話やインターネットがつながりにくく、スタッフとの

連絡に大きな支障をきたした。食料については、系列局から支援助物資が届き、本当に助かった。ただ沿岸部の中継車や取材スタッフは食料の入手が困難で毎日本社から配送を続けた。取材車両のガソリンも1か月近く不足し、これも系列局の支援で何とかしのいだ。とにかく、震災報道を継続するための手配の重要性を痛感させられた。

### 沿岸部の支局スタッフの苦悩

沿岸部の報道部の支局のうち、石巻支局のカメラマンは、地震発生直後の様子を撮影したあと、「津波の高さ6m」という防災無線を聞き、高台にある日和山公園に向かい、津波の襲来を映像に収めた。その後は、被災した地区の取材を続けた。

また、気仙沼支局のカメラマンも、地震発生後、港の様子を撮影したあと高台に移動し、街が津波にのまれていく惨状を撮影した。その後、2人の支局カメラマンとは、携帯電話がつかなくなったり連絡が取れなくなった。石巻市や気仙沼市の沿岸では、大規模な火災も発生しており、安否が気遣

われた。ひたすら2人の無事を祈るなか、ようやく3日後になって、ともに系列局の中継車から取材した映像を伝送してきて、無事が確認された。2人のカメラマンは、いづれも地元出身で、家族や友人が被災していた。その悲しみや辛さに堪えながら全力で被災地の取材を支えてくれた。



震災発生翌日の石巻市中心部

### 津波に遭遇した記者の映像記録

あの日、たまたまニュースの取材で仙台市の沿岸部にいた1人の記者がいた。地震発生後、乗ってきたタクシーで避難しようとしたものの、大渋滞に巻き込まれてしまふ。一時は死をも覚悟した記者は、ビデオカメラを回しながら海

岸に並行して走る。そして、遂に津波が迫ってきたのを見て、車を捨て、間一髪でビルに逃げ込む。そのビルの周囲には、助けを求めた人びとが何人もいた。記者は、市民が、率先、ビルの外に孤立した人びとを救出する様子を、励ましながら撮り続けた。

この津波に遭遇した記者の映像は、津波からの避難そして被災者の救助という市民としての行動と、震災の事実を記録し伝えるという職務の狭間で、これまでの経験と知識をもって状況判断しながら撮影したものだ。



3.11映像記録  
～「語り継ぐ震災の記憶」

TBCは、映像に出てきた人たちの証言を集めた上で1時間の番組にまとめ、震災発生から1年に合わせて放送した。

### 系列局の応援で被災地から全国発信

震災発生後、被災地には系列局のクルーや中継車、ヘリコプターがかけつけてくれた。優に100人を超える規模で、連日のニュース取材や中継、番組制作にあたった。応援クルーは、寝ることも食べることもままならない過酷な条件の下、余震や津波を警戒しながらの取材を続けた。

さらに5月からは、気仙沼市に系列局の取材拠点「JNN三陸臨時支局」も開設された。この支局は、岩手県山田町から宮城県石巻市までをエリアとした。

大きな余震などが発生し再び津波が来た場合に備えるとともに、被災地に長期間住んで取材を続けることで、被災者に「寄り添った」報道を続けることができた。

加えてTBCでは、この三陸支局から、夕方のローカルニュースで約1年間、記者が中継し、必死に生きる被災者のありのままの姿をリポートした。

### 「震災特番」を続け、 震災の記憶を後世に

震災発生から1か月後の4月7

日、ゴールデンタイムに2時間の  
 特番を組んだ。専門家を交えて今  
 回の津波を徹底検証するとともに  
 辛い日々を送る避難所の人たちや  
 存亡の危機に立たされた農漁業の  
 実情を通じて、復旧・復興の課題  
 を探った。そして、津波の記憶を  
 後世に伝えるとともに、山積する  
 課題を検証するには、番組制作を  
 続けていくべきとの結論に達し、  
 毎月1回の震災特番『震災の記憶』  
 が始まった。

番組は「あの日、何が起きたの  
 か」と「課題を徹底検証」の2つ  
 を軸に構成した。これまでの放送  
 では、「大川小の悲劇」「漂流夫婦  
 の生還」「高台移転の行方」「漁港  
 の再起へ」「母を失った少女」など  
 計20のテーマを取りあげた。

鮮明だった震災の記憶が次第に



「TBCルポルタージュ  
 “震災の記憶”#1」

薄れるなかで、被災地の復興はよ  
 うやく緒についたばかりである。  
 この大震災を後世に伝えるため  
 にも、被災地に腰を据えて、日々  
 のニュースとともに番組も続けて  
 いかねければならない。



『サンドのぼんやりぬTV』

被災地に“元氣と笑顔”届ける

『サンドのぼんやりぬTV』

この番組は、深夜帯のローカルの  
 バラエティーとして2008年に  
 スタートした。

仙台出身のお笑い芸人のサンド  
 ウィッチマンの2人が宮城県内を  
 回り、地元の人たちと触れ合い、  
 茶の間に笑いを届けてきた。

震災発生の日、気仙沼市でロケ  
 中だった2人は山の上に避難し、  
 街を飲みこむ津波の猛威を目の当  
 たりにした。その後、再開した番

組は、被災地復興の応援色の濃い  
 内容となり、最大約20局がネット  
 した。

以前訪れた場所では、変わり果  
 てた惨状に絶句した。また、ある  
 時は、がれきの撤去を手伝った。  
 地元出身として復興への思いを  
 共有し、地域への恩返しを込めた。  
 必要以上に深刻ぶることはなく、  
 ユーモアを交えながら人々の真摯  
 なメッセージを伝えた。



ローカルワイド『Nスタみやぎ』

ロケは被災地を一巡し、2度目、  
 3度目のところもある。ふるさと  
 に元氣と笑顔を届ける旅は、これ  
 から続く。

『ウオッチン！  
 プラスー絆みやぎ』

被災地では復旧・復興への歩み  
 が始まっている。しかし、あの日

から時間が止まったままの被災者  
 も少なくない。今だからこそ、伝  
 えなければならぬ『現実』が無  
 数にあるのだ。

そんな中で、この番組は、被災  
 地を元気づけようと、月々金放送  
 の朝のローカル情報番組の「震災  
 復興版」として立ち上げた。去年  
 5月から、毎週土曜日の午前帯に  
 放送してきた。

被災地を取り巻く様々な課題を  
 掘り下げる特集と奮闘する被災者  
 を紹介するコーナー、それに震災  
 関連のニュースを軸にしている。  
 番組では、被災地が必要として  
 いる情報を幅広く伝えてきた。そ  
 うすることによって、多くの困難  
 を抱えながらも、歩み出そうとし  
 ている人たちの“絆”をつないで  
 きた。地域が本当の笑顔を取り戻  
 し、元氣を取り戻すことを願って  
 いる。

震災を記録したDVD制作

震災の貴重な映像は、記録とし  
 て残していかなければならない。  
 しかし、津波に流されて家族や友  
 人を失った人たちにとっては、い  
 つまでもテレビ放送で津波が襲来  
 する映像を見るのは辛いはず。



TBC制作のDVD

こうしたことから、TBCは、宮城県の津波映像を収めたDVDを制作した。映像は、TBCのスタッフのほか、国土交通省や自衛隊などの関係機関、それに市民が携帯電話のカメラで撮ったもの。テレビで放送されるニュースや番組と違って、素材を殆んど編集しないオリジナルのままを収録した。津波がどういふ状況からどういふふうにして来たか詳しく分かるようにしたのだ。DVDには、東北大学の専門家による津波のメカニズムの解説や津波高のデータも収めた。これまで県内の自治体や教育機関などに配布したほか、書店やコンビニで一般販売もしている。

東日本大震災の津波を分析し、今後の防災研究・教育に役立ててもらうには幸いである。

**全国と被災地の「温度差」**

震災発生から1年以上経つと、全国ニュースで被災地が取り上げられる頻度がぐっと減ってくる。東京や西日本の知人から「被災地はもうだいぶ良くなったでしょう」という言葉をかけられる。だが、現実には、がれきが1か所にまとめられ、被災者は避難所から仮設住宅に移っただけ。

震災前の生活とは程遠く、元の生活を取り戻せる見通しは立っていない。最近、被災地を訪れた人は、「まだ変わらないですね」と言う。地元では、そうは言っても1年間でずいぶん片付いたと感じているのに。要するに、被災地以外の人にとっては、震災は、もはや「過去」なのだ。しかし地元では、震災は続いている。この全国と被災地の乖離を埋めるにはどうすれば良いか。それは、被災地の復興に歩みだす姿に目を向けるだけでなく、山積した課題を検証し、全国に伝えるしかない。

まさにこれから震災報道の真価が問われる。

### 広がる被災地間の「格差」

震災発生から月日が経つにつれて、被災地の中でも格差が顕在化しつつある。

例えば、同じ仙台市でも、JR仙台駅周辺や東北一の歓楽街「国分町」は、今や「復興需要」の盛りで、震災があつたことは微塵にすら感じさせない。その一方で、沿岸部の若林区などでは、何もかも津波にさらわれた住宅地の跡に雑草が生い茂り、住民は、仮設住宅やみなし仮設で不便な生活を強いられている。

また、石巻市や気仙沼市では、旧市街地は、元通りには程遠いとはいえ、企業が操業を再開し、港湾の復旧も進んでいる。復興に向けた市民の動きも活発だ。

ところが、合併で一緒になった半島部などの多くは人影も殆んどなく、復旧の進捗も遅い。そうした地域はニュースに取り上げられる頻度も少ない。これに対処すべく、夕方ニュースで「被災地キョラパン」として、こうした地域を回り日頃、目立たない被災地の声を紹介している。

### 震災2年目以降も課題山積

「復興元年」ともいわれる震災2年目は、被災地再生への第一歩になる。しかし、難航する大量の瓦礫の処理をはじめ、住民の集団移転や災害公営住宅の建設、漁港機能の集約化、雇用の確保、医療の再生、被災企業の再建、学校の再建、津波防災の見直し、被災者の心のケアなど課題は枚挙に暇がない。

さらに、東京電力福島第一原発事故で宮城県も基準超の放射性物質が検出され魚や野菜が出荷できないなど影響は大きい。

学校などでは漸く除染作業が始まったばかりで、住民の不安も解消されていない。東北電力女川原発の再稼働の問題もある。

このように課題が山積する中、TBCは、石巻・気仙沼支局など沿岸部の体制を強化すると共に、JNN三陸支局にスタッフを継続して派遣している。

「地元局として何ができるのか」自問しながら、震災の記憶が風化しないよう、今後も被災地から伝え続けたい。

【写真提供 TBC 東北放送】